大正文学史

瀬沼茂樹

講談社

著者略歴
評論家。明治三七年、東京の生れ。東京商大卒。昭和八年、評論集『現代文学』を刊行。ほかに『近代日本文学のなりたち』(昭二六)『近代日本の作家と作品』(昭三〇)『評伝島崎藤村』(昭三四)『現代文学の条件』(昭三五)『夏目漱石』(昭三七)『近代日本文学の構造』(昭三八)『戦後文学の動向』(昭四一)『伊藤整』(昭四六)『日本文壇史』19～24(昭五二～五三)『野上弥生子の世界』(昭五九)など多数。

大正文学史
一九八五年九月二〇日　第一刷発行

著者——瀬沼茂樹
© Shigeki Senuma 1985, Printed in Japan.
発行者——野間惟道
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—三—三　郵便番号二三　電話東京〇三—九四五—二二二(大代表)
印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——大製株式会社
定価——三九〇〇円
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-201057-7(0)(文1)

大正文学史　目次

序言……七

第一部　大正前期

第一章　一九一〇年以後……一五

第二章　理想主義文学……三三

(一)　夏目漱石の場合……三三

(二)　白樺派の人たち……四三

(三)　教養派とその周囲……六〇

第三章　享楽と耽美……七五

(一)　森鷗外の再活躍……七五

(二)　上田敏と永井荷風……八五

(三)　若い世代の文学者たち……九四

第四章　自然主義の転移……一一〇

(一)　自然派の巨匠たち……一一〇

(二)　抱月と『早稲田文学』……一二四

(三)　写生派と奇蹟派……一四六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

第五章　民衆の中に……一五九
(一)『近代思想』と労働文学……一五九
(二)生活派と民衆派……一七〇
(三)『青鞜』の女性たち……一七七

第二部　大正後期

第一章　一九二〇年前後……一八九
第二章　個人主義文学……二〇九
(一)芥川龍之介……二〇九
(二)新思潮派の人たち……二二七
(三)藝術至上主義……二三六
第三章　理想主義の展開……二五四
(一)文化主義と人格主義と超近代主義……二五四
(二)白樺派の思想的転回……二六八
(三)同伴と転換——既成作家たち……二八三
第四章　プロレタリア文学の勃興……三〇四

(一) 社会主義思想の発展と分裂……三〇四
(二) 『種蒔く人』の時代……三一〇
(三) 『文藝戦線』と『戦旗』……三一九
第五章　近代藝術派の成立……三三三
(一) 前衛藝術の擡頭……三三三
(二) 新感覚主義……三四一
(三) 横光利一と川端康成、その他の作家たち……三四九
第六章　大衆文学の興隆……三六六
(一) 大衆文学の成立……三六六
(二) 多様な時代小説……三七六
(三) 現代通俗小説の展開……三九一
(四) 近代探偵小説の誕生……四〇四
結　語……四一六
主要参考文献……四二〇
あとがき……四二四
索　引……巻末一

大正文学史

装幀　辻村益朗

序

言

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

ここに大正文学と称するのは、広義に解釈して、大正時代の前後を併せて、およそ二十年間を綜括している。すなわち一九一〇年代、一九二〇年代の二十年間を蔽うて、世界史への展望をひそかに背後に置いている。

一九一〇年（明治四三年）は大逆事件の年である。「冬の時代」と称した明治社会主義者ばかりでなく、一般日本人にとって忘れられぬ第一次世界大戦につらなる転換期の始である。一九三〇年（昭和五年）は、昭和二年の金融恐慌、昭和四年の世界恐慌の中で、日本ファシズムは一方に三・一五事件、四・一六事件を推進し、他方に「満州事変」を喚起して、公然と頭を擡げる前年に当っている。だから、この二十年間は、短いようにみえるが、政治的にいえば、護憲運動という形で、明治の藩閥政治の暗い闇を破って、大正ディモクラシが擡頭し、不充分とはいえ、大衆社会の端緒を形成しようとしているかにみえた。その故にまた労働運動、社会運動という形で起った社会改造の機運、他方ではワシントン軍縮会議からロンドン軍縮会議で結ばれた軍縮条約への方向に反撥して、軍閥が主導する日本ファシズムがこれを抑え込み、終止符を打とうとする機会を狙いはじめたころである。近代民主主義を中心に考えれば、その勃興から早くも衰頽をみせはじめる最初の期間と考えることができる。

文学史的にいえば、日露戦争前後から起った自然主義文学運動とともに日本近代文学は確立するが、早くもこの時期からもろもろの反自然主義文学が起り、多様な分化と個性的な成熟を迎えた豊潤な一時期であった。やがて明治社会主義の系譜を引いてプロレタリア文学の擡頭に遭い、日本近代文学の解体を促し、日本ファシズムに挾撃されて、次の新しい段階に入る。すなわち現代文学への静かな推移が起り始めると考えられる。たしかに日本自然主義は、封建主義や中世主義を破って、日本人の考え方や感じ方を近代化したが、同時に浪漫主義、理想主義、耽美主義などを初めから包含し、その展開につれて、日本自然主義は変質し、新たな浪漫主義や理想主義や耽美主義を呼び出し、分化と成熟との度合を深めも高めも豊かにもした。これを支えるものが大正ディモクラシと大衆社会の形成とであるとともに、社会主義思想をプロレタリア文学という形で成立させ、或いは大衆社会状況に応ずる大衆文学や通俗小説の生誕となり、かく解体した近代文学は新感覚主義という形で再起をはかり、やがて日本ファシズムの強圧に出会うのである。この経緯が二十年間の大正文学の推移と厚味として把えられる。

もちろん、かような考え方は、明治期から形成されてきた近代文学が、その確立を成就しえた自然主義作家をも含めて、この大正期に多数の有能な作家を輩出させ、個性的に多様でもあれば、豊潤でもある文学世界を花ひらいたにも拘らず、第一次世界大戦と関東大震災の中で次第に私小説に粋を見出すように矮小化し、新感覚派文学、大衆文学、プロレタリア文学などの成立を呼び、解体してゆく有様を捉えようとする試みである。現代からみて、明治文学の終焉とも、近代文学の解体ともいえるし、昭和文学の発生とも、現代文学の成立とも重複して考えられる——実際に、またそう称えられる時期が苦渋にみちて訪れてくるのは何故であるか、大正期の分化と

成熟とに対照して考えねばならぬ奇妙な困難を、大正作家の人間観や文学観の行末と併せて、もう一度見直してみる機会にしたいと思うからである。

大正文学の特質や性格を考えるにさいして、その個性的分化と豊潤な分化とがもたらした諸動向の性質や性格にもとづき、複雑で繊細を極める文学意識の底を掻いくぐり、できるだけ歴史的聯関をたどっていきたいと思う。その際、個人意識や社会意識、自我意識や美意識を支配する思想史的方法に立って位置づけをしてみたい。その上で、個々の作家の文学観や文学的方法にしたがい、個性の多様な特色をも追尋しておきたい。本来からいえば、各作家の特色や指向からみて、その全体として実現できたものの意味を把握し、推移を考察し、その間の歴史的聯関を浮びあがらせるのが本旨であろう。たとえば、大正後期も末に入り、自我の理念の解体や人格の崩壊に遭い、各作家はいかに自覚し、いかに苦悩し、文学の方向を外部（社会）から捉え直すか、或いは内部（深層意識）から捉え直すか、はたまた大衆状況に順応して娯楽や通俗に走るか、その収拾や再建への経緯を見究めるが如きことである。しかし非力な著者に、果してどこまで充分にその場合々々に応じて意図が果せるか、予め予測することも、言い現すこともむつかしい。

事の成否はとにかく、私としては大正文学史として心をこめた新しい試みである。この小さな試みは、青少年時代から大正文学に育まれることの多く大きかった私の大正文学への思慕あるいは報恩と呼んでもさしつかえあるまい。たとえ列挙的な稿本の域を出ない出来栄えにとどまる結果になっていようとも、私の力の及ぶかぎりでの大正文学の総浚えにはちがいないのである。

第一部　大正前期

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.